



福祉系

対人援助職養成の

現場から 51

西川 友理

〇〇さえなければ実習は楽しい！

保育者養成校ではたくさんの科目がありますが、なんといっても「実習」は最も大きな科目になるかと思います。

いつもの学校を離れ、一定期間、時には泊まり込みで、実習現場に入る。体と頭と心を丸ごと使って、様々な学びをしてくる学生です。

「とても勉強になりました。」

「子どもめっちゃ可愛かったー！」

「面白かった！」

でも、その後皆大体同じセリフを言います。

「ただ…日誌がめっちゃ大変でした…」

「日誌さえなければ、楽しいんですけど…」

実習日誌は日々の記録や学んだことを書き起こし、翌出勤日に提出するものです。に数時間かかり睡眠時間が削られるとか、書き方がよくわからない、というのは、保育実習あるあると言えます。フォーマット

の基本は概ね決まっていますが、細部は自治体や園によって（というか、担当する先生によって）微妙に違うので。実習前の授業などで指導しきれないところがあります。

この連載の第32回目にも記録の大切さという話を書きましたが、今回は、では実際にどんな記録をしているかについて、お話しします。

保育実習の記録について

先述した通り、実習日誌は養成校によってフォーマットが違うので、一概にこれが正しいとは言えないのですが、よくある記録の内容を紹介します。

・日時、天気

天気の記録、実は重要です。晴れた日は子どもたちも保育者もなんとなく開放的になります。雨の日はなんとなくいつもと違う雰囲気と、外に出られないという環境のために、子どもの心や行動も変わります。外に出られないことからストレスの多い環境になることもあれば、逆に雨だからこそ出来る外遊びをする場合もあります。

・今日の実習生の目標

その日一日、どんな目標を持って現場に入らせていただくのかを考え、実習前にそれを書きます。実習現場によっては「はい、今日のあなたの目標は？」と毎朝聞かれ、それを答えてからでないフロアに入れないところもあるとのこと。

現場には毎日様々なことが起こり、「わーすごい！」「へー！」「ほー！」と言って感

心している間に、あっさり一日が過ぎてしまうことがあります。ちなみに私はこれを“テーマパーク型実習”と読んでいます。次々とアトラクションや楽しませるものがあり、その体験を消費するだけになってしまふような、お客さんとして過ごす実習です。

その日一日、何を学びたいと思っているのか目標を持つと、実習の場に対して、目的をもってかかわる、主体的な目が生まれできます。

・環境構成／実習の内容

保育の場はどのような環境であったのか、部屋の全体図を書いたり、環境構成の配慮する点の説明を書いたりします。ゲームや何かの製作をする場合にはその手順も書きます。環境構成を詳細に書いたら、その横に実習の内容として、何時に何をしたのか、時系列に沿って、大体の行動記録を記します。朝の会や、排泄、食事など、日々の生活の流れを書きます。

・子どもの活動／保育者の援助

それぞれの保育場面で、子どもがどう動いていたのか／これに対して保育者がどう援助したのか、を書きます。例えば食事の時間にスプーンを使ってうまく食べられない子どもに「あーん」と口の中に食べ物を入れる場面については、子どもの活動欄に「食事をする」/保育者の援助欄に「子どもが楽しい気持ちで落ち着いて食事ができるように、子どものペースに合わせて言葉をかけながら食事介助をする」、と書きます。

この欄のポイントは2つあります。1つ目は、子どもを行動の主体にして書くということです。保育者は、子どもの行動をサ

ポートするためにおり、あくまでも行動の主体は子どもであるという考え方です。もう1つは、保育者の行動の意図を書くという事です。保育者の専門職としての行動にはすべて意味があると考えます。何のためにそれをしているのか、どんな思いを持ってどうしたいと思うから、どんな手段でもって、何を行うのかといったことを詳細に書きます。

この欄に、昨今の保育の基本的な姿勢・態度が如実に現れていると感じます。

・まとめ・ふりかえり

一日の実習を振り返って学んだことを書きます。この欄で大切なことは、単なる感想文にならない事です。「学習をしている」のだから、基本的に観察、考察、次への課題という構成で書き、「面白かった」「かわいかった」といった感想文にならないようにします。自分の感情の動きを書く場合でも「なぜこんな感情になってしまうのだろう」「こういう行動をしたのはこの時思わずこう感じたからではないか」と一旦その感情についても考えてみようという指導をしています。

この記録をすべて書くと…

大体平均して、3時間くらいかかってしまいます。文章を書くことに慣れている学生でも2時間くらい、文書作成が苦手な学生だと、時には5時間くらいかかるという場合もあります。毎日それだけの時間を、記録に割くととなると、とても大変な作業です。その上、保育の現場は今でもパソコン入力ではなく、手書きで資料を作るように

指示されることが多いのです。以上のことから、実習は、健康な心身で子どもと関わるといことがとても大切なはずなのに、記録のために睡眠時間を削られ、体調不良になる学生もいます。この状況は本末転倒です。そう考える園や養成校では様々に工夫を凝らしてその他の記録の方法をとっているところもあります。

様々な記録方法～ドキュメンテーション、エピソード記録など

例えばドキュメンテーションと呼ばれるものがあります。一般的に、ドキュメンテーションという言葉は、ある事柄に関するデータや情報、記録などを、他の人が理解しやすい形式の文書として体系立ててまとめることや、そのようにしてまとめられた文書群のことを指します。しかし、保育の分野で最近記録の技術として使われているドキュメンテーションは「子どもが遊び・活動する様子、人・自然・モノとの関わりや学び・育ちの内容などを、写真とコメントで記録」していくものです¹⁾。イタリアのレッジョ・エミリア教育から始まったものですが、これを実習生に課しているところが少しずつ増えてきました。

実習生は園のカメラを貸し出され、様々な写真を撮り、その写真にその時誰が何をどうしていたのかを詳細に書き、これに対する解釈を書きとります。一日の記録全体を書くのではなく、「あ、これは！」と感じた一場面を写真にとり、これについて深く掘り下げます。

写真や映像を基にしているため、その場にはいない保育者や実習指導教員などからも

状況が把握できやすい上に、解釈の誤解への指摘など、指導もしやすい方法です。

それから、発達心理学者の鯨岡峻が開発した記録方法で、エピソード記述というものがあります。これは「出来事に対する保育士の心境や心情を言語化して記録します。保育日誌のような時系列に出来事を羅列した記録ではなく、保育士の印象に残った一つの出来事、ある一場面についての記録」²⁾です。

鯨岡は、気持ちを向け合う人と人のあいだに生まれる独特の空間や雰囲気や「接面」と称し、少なくとも一方が他方に志向を向けて関係性を作り出そうとしていることから生じるとしました。そして接面から人は実に多様な何かを感じ取り、これが人の生にとって極めて重要な意味をもっているという考えを示しています³⁾。エピソード記述は、簡単に言うと、この「接面」を（すべては難しいですが、出来る限り）書き起こす手法であると言えます。

ある一場面だけを取り上げますが、その一場面について、①その場面に至った背景／②その場面そのもののエピソード／③エピソードに対する考察、の3つを書くことで、深く掘り下げます。大きな特徴はそのシーンにおいて保育者がどのような感情であったか、内面で生じた思い・感じ方を書き起こすところにあります。「なんてかわいいんだろうと思わず手を伸ばした」とか「ついカチンと腹が立って、背を向けてしまった」といった、その時の思いが豊かに記述され、その部分こそが大切になってきます。

客観的記述の取り方をしっかり身に着けた学生に、エピソード記述を初めて紹介すると、多くの学生は「ほう…」とうっとり

します。

「そうそう、こうなるこうなる！」

「わかるー！」

「ここが保育の肝やし、醍醐味やんな。」

「そうそう。ここの、なんていうか、こういう、つながりやんな。」

それまで学んできた“記録は客観的な事実が大事、主観をなるべく排して書く”という方法とは真逆の記述方式に、強い感銘を受ける学生達です。

「この記述方法で、保育を振り返ることについて、どう思う？」と聞いたことがあります。すると、

「絶対に保育力が上がる！！」

「何か“省察”がしっかり出来るかんじ！」

「子どもと関わる時って、気持ちがどう動くかが、すごく影響するもの！」

さらには、

「でも…まずはこの記述を読む相手が、安心して共有できる相手かどうか、ということが大事だと思う。」

「あと、客観的記述の大切さがわかる状態になったから、これ書けるんやと思う。」

1年の初めからこれはしない方がいいかも…」

という回答もありました。

ドキュメンテーションやエピソード記述に見られる特徴として、「主観を重視する」という点があります。

客観的な事実を客観的に記述することは、記録の基本ではあります。専門職として、まずはそれができるようになることはとても大切です。しかしその一方で、子どもとの直接的な関わりは、目で見え、耳に聞こえる事実の背景に、その時の双方の心の動き、鯨岡のいうところの「接面」があるもので

す。そこに何があるのか、意味や背景を解きほぐすことで、どのような保育が展開されたか、解釈することが出来ます。

記録の傾向

今までの記録方法はどちらかというと子どもを“主体”にして、保育者がどのような“ねらい”に基づき、どのような“意図を持って”関わっていくか、ということが重視されていました。つまり、「子どもと関わる前に” 関わる際の自分の方向性と意図を明確に持つ」ということが中心となっている記述の仕方だと思います。無計画に保育をするわけではないのですから、意図やねらいはとても大切なものではありません。

しかし、実際に子どもと接してみると、当然ながら予定していたことではない、様々なことが生じます。意図やねらいとは全然関係ない出来事が起こった際、自分のおなかの中から生じる気持ちや、揺れ動く心から、自らの行動や言葉を紡ぎだし、行動するしかありません。

対人援助職において、自分の第一次的な生の感情はどちらかというと支援の邪魔になるモノと考えられてきました。主観的なものの見方を排し、専門職としての知識を基に、訓練された技術を使って冷静に関わることが肝要だとされてきました。しかし、実際は鯨岡先生の主張のように、子どもと自分の人間性や感情の“界面”で、保育は生成されていきます。そこで「“子どもと関わっているまさにその瞬間に” 自分の方向性や意図はどのようなものであったのか」

を探ることが、省察的实践としての保育を解きほぐす手段になる、と考えられるのです。

ある園の実習担当者の言葉

ここに上げたような新しい記録方法をとる園はまだまだ少数です。多くの園は、最初に書いたような、日々の時系列の流れを書き、そこでどのような意図のもとに保育が行われていたのか、という記述をしています。

ある園の実習担当者は、「毎日ルーチンで行っているプログラムの記述を繰り返すことにどこまで意味があるのか」と思い、日々の時系列の記録は実習3日目まで、そこから先は毎日任意の一場面を取り上げてエピソード記述を課すことにしたと話してくださいました。

「実習ではデイリープログラムを知ることは大事、それは間違いありません。生活の基本を知ることですから。」

「だけど、別にうちの園に就職するというわけではない学生です。うちの園のやり方、うちの園のデイリープログラムを何度も書いて、覚えさせてどうするの、と思うわけです」

「だったら、もっと立ち戻って、保育の中心になるところを理解できる実習をしてみたらどう思ったんです」

「中心になるところっていうのはつまり“自分は子どもや周囲の人とどのような関わり方をしているか”ということです。」

どの記録が正しいとかどの記録方法が間違っているというわけではありません。客

観的事実を記述する記録、意図を記述する記録も、専門職になるためには、絶対に欠かせないスキルです。

ただ、記録の方法一つにも、「保育とは何をどうすることなのか」「保育で大切な意識は何なのか」、その時代の考えが反映されるのだということを強く感じています。まだまだ主流ではありませんが、保育の現場で、保育者の“主観”がどう扱われていくか、その移り変わりの真っ最中のように感じています。

今回紹介した記録とは少し違う視点の記録として、環境図や園内マップなどと呼ばれるものがあります。これは園内の様子を図で示し、そこでだれがどこでどんな行動をしているか、絵に描く記録です。これらが徐々に増えてきている背景には、「環境」への着目があると思うのですが、これはまた別の機会に取り上げたいと思います。

.....

1) ホイクテラス「ドキュメンテーションって？」

<https://hoiku.benesse.ne.jp/dmt/>

2) ほいくらし「保育のエピソード記録とは？上手に書くポイントと書き方・例文」

<https://hoiku.mynavi.jp/contents/hoikurashi/childminder/knowledge/9277/>

3) 鯨岡峻「接面とエピソード記述」

https://gpsw.doshisha.ac.jp/pdf/xDelete-s_150926a.pdf